様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：４４４２２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１１６６

研究課題名（和文）幼児の学びと保育者の保育を支援するタブレット用アプリとその活用に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Tablet Apps and Their Utilization to Support Children's Learning and Nursery Teacher's Education and care

研究代表者
松山　由美子（Matsuyama, Yumiko）

四天王寺大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：９０３２２６１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：幼児の学びと保育の支援ツールとしてのタブレット活用をめざして開発したアプリ「ASCA」の実際の活用から保育現場でのICT活用可能性について検討した。1)幼児のタブレット活用で導入し始めたが、保育者が保育評価を行う際に活用できると気づき、保育者の評価支援ツールとして活用し始めた。2)保育者が評価に使うことだけを考えてタブレットを導入したが、評価の際、幼児もタブレットを活用することでより深い評価ができるという考えに至った。
保育現場で使用するアプリは、幼児用や保育者用と分けて制作するのではなく、幼児の学びを可視化し、保育者の評価も支援できるという視点で制作することが重要だと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の保育現場でタブレットを活用する際の視点を提示した。保育者が保育のねらいにそって幼児と共に活用方法を探ることで、幼児の学びを可視化し、豊かな保育評価の援助を可能にするツールとなりうることが明らかになった。したがって、アプリで設定したテーマで幼児が学ぶ活動だけではなく、幼児の活動や興味・関心に応じ、幼児の活動の速さに対応できるユーザーインターフェースをもつアプリの開発が求められる。
一方、セキュリティに対する考え方の普及やインフラストラクチャーの整備など課題は多い。保育でのICT活用の可能性を高めることで、幼児が主体的にICTを活用する力の基礎を培う幼児教育を提案することが今後も重要である。

研究成果の概要（英文）：We investigated how the application "ASCA", which was developed with the aim of using tablets as a support tool for early childhood care and education, is used in kindergarten/nursery school. As a result, 1)Nursery teachers realized that it was effective not only for the use of tablets for children during care/education, but also for the use by nursery teachers in the assessment of childhood care and education. 2)Although it was used only for the purpose of being used by nursery teachers for assessment, they came to the idea that children can use tablets together to deepen their care/education assessment.
We have concluded that it is important that we have two points of view: 1)the apps may be developed to use for not only children and also nursery teacher together in kindergarten/nursery school, 2) tablets (or apps) may use to not only visualize the learning of children and also use to support the assessment for nursery teachers.

研究分野：教育工学　幼児教育学

キーワード：保育でのICT活用　タブレット　幼児のICT活用　アプリ開発　保育用アプリ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本の家庭生活においては、スマートフォンやタブレットなどさまざまな情報利用が見られる。内閣府による「消費動向調査」でも、2014 年 3 月に「タブレット型端末」の項目を追加して調査を行うなど、家庭への普及に応じた対応が見られる。実際、タブレットの普及率は年々増加しており、2 人以上世帯での普及率が 32.0%(2016 年時点)と伸びている。

一方で、保育における情報利用については、十分に普及しているとは言いがたいが、2015 年時点での保育現場におけるメディア保有率及び活用率の調査結果[1] を概観すると、メディア機器の進化やそれに伴う保育者の使いやすさ、さらに保育へのメディア活用イメージのしやすさ等によって、メディアが保育現場に普及する可能性があることが分かる。例えば、パソコンもデジタルカメラも保育現場における保有率はともに 95%前後であるが、その活用については、パソコン利用が 11%に留まっていることに対し、デジタルカメラの活用は 69%である。同調査によると、タブレットに関しては保有率が 9%であるが、その活用率は 5%である。デジタルカメラと同じようにカメラ機能を中心に保育者がタブレットを保育で活用する価値や活用イメージを理解することで、保育現場においてタブレット活用がデジタルカメラと同じように活用が普及する可能性があると考える。

日本の保育現場におけるメディア活用の遅れは諸外国と比較しても顕著である。例えば、アメリカでは、アメリカ幼児教育協会の声明においても、幼児教育での適切な利用を支持するという提言が明示されているだけではなく、開発されたソフトの利用評価も進んでいる。[2] 2016 年 10 月に研究代表者が行った韓国の保育現場の視察調査からも、5 歳児クラスからコーナー保育でのメディア活用が進んでいることが明らかになった。実際に幼児が図鑑代わりにインターネットを保育者と共に活用したり、自らの遊びに必要なソフトを活用することが日常的になっている。企業と地域の育児総合支援センターが共同で教育用ソフト開発する動きも活発である。

上記のような状況を見据えながら、研究代表者をはじめとする研究者らは、「幼稚園における幼児の学びと保育者の援助を支援する情報端末アプリケーションの開発」を行ってきた。過年度研究では、保育者養成の立場でのメディア活用のあり方や、保育現場や子育て支援等でのメディア活用のあり方、日本で活用されているアプリケーション(以下、アプリ)についてまとめながら、さまざまな立場から保育現場でのタブレット活用の普及を見通し、その活用による幼児教育のあり方を課題としてとらえ、教育・保育現場及び家庭環境での現状を整理し、幼児用アプリの開発と活用の成果と課題を収集を行い、幼児が保育現場で身につけることを望まれている協同性や創造性、思考力、表現力などをより豊かにするための支援を目的としたツールの必要性を明らかにした。この知見をもとに、2015 年度に幼児の育ちと保育者の保育の支援を行うためのタブレット端末アプリ「ASCA（Archives Sharing and Creating Anytime for preschool)」を開発した。このアプリは、保育場面で幼児が発見や感動、他者に伝えたいことを静止画と音声で記録し、それらを同じクラスの幼児や保育者と共有することができる。さらに、保育者が幼児の静止画に対して撮影場所や内容等をタグ情報として付けることができる。これら全ての静止画と音声情報と保育者による文字情報(タグ)の記録、検索及び閲覧と、静止画の印刷が可能である。2016 年度から大阪府 1 園、奈良県 2 園の保育実践で本アプリの実証実験を行った。その結果、幼児の協同性や表現力の育みへの寄与が明らかになった。また、操作性やタグ付け機能等を改善することで、保育者の保育立案や幼児の評価においても有効なツールとなりうることも確認された。[3]

本研究では、設定保育だけではなく、自由保育も含めた多様な保育形態での実証研究を重ねることによって、日本の保育現場におけるタブレット活用とアプリ開発の視点から、「豊かな保育実践の中でこそメディアが幼児の主体性等の育みを促すツールとなりうる」という保育現場における望ましいメディア環境のあり方についてエビデンスをもとに提言を行うことがこれからの保育に必要ではないかと考えている。

２．研究の目的

幼児期のメディア利用が進みつつある現在、メディア利用をただ否定するのではなく、幼児にとって望ましいメディア環境、安心かつ適切なメディア利用方法を検討する必要がある。研究代表者は、幼児の育ちに適した情報の教育・保育利用について考え、幼児期の学びにふさわしく、かつ保育者も安心して活用できるメディア教材の開発が重要であると考えており、2014 年度から幼稚園等の保育現場における幼児の育ちに寄与するタブレット用アプリケーションの開発に着手し、保育現場で実証実験を始めた。この研究を今後積み重ねることで、幼児の育ちや保育者の保育を支援するタブレット端末の活用とアプリケーションのあり方をまとめ、保育現場における望ましいメディア環境のあり方を、特にタブレット端末活用やアプリ開発の視点から提案する。

３．研究の方法

平成 29 年度は、過年度研究からの実践継続園及び新規に実践を依頼する保育現場によるタブレット用アプリを活用した保育実践を観察し、その結果をまとめる。

平成 30 年度以降は、それまでの結果をもとに、幼児の育ち及び保育支援ツールとしてのタブレット用アプリの評価と検討を行う。国内の幼児向けタブレット用アプリ及び国内外の幼稚園におけるタブレットを活用した保育について調査を行う。最後に、保育現場におけるタブレ

ットを活用した保育の意義や活用、アプリ設計のあり方についてまとめ、提案できるよう整理する。そのため、本研究では、上記の研究の目的に基づき、「幼児教育において従来あるかかわり」と「タブレットを導入することによって発生するかかわり」の検討を進め、研究者らの参与観察や保育者への聞き取り調査の結果からアプリを改良する視点を得るだけではなく、アプリ開発に必要な考え方をまとめる。

保育現場における実践を通したアプリ活用実証実験は、大阪府公立幼稚園 3 園，奈良県公立幼稚園 2 園，奈良県私立保育所 1 園，愛知県公立保育所 1 園で行われた。

大阪の公立幼稚園及び愛知県の公立保育所では､遊びを中心とした自由保育を展開しており、あるテーマに沿ったアプリは活用しにくく、むしろ幼児の興味・関心に沿った遊びの中で使える本アプリ「ASCA」は非常に使いやすいと導入してくださった。奈良県の私立幼稚園では、設定保育での活用を試みてくださった。奈良県の公立幼稚園では、幼児がタブレットを活用することではなく、保育者が保育評価に活用できると考えて導入したため、幼児は活用していない。各園での活用方法を観察し、エピソードを収集し、保育者からの聞き取り調査を行うことで、それぞれ活用方法や頻度は違うが､「ASCA」を活用することで、保育現場でのタブレット活用が実際にどう変容したかをまとめ、今後の保育現場でのタブレット活用可能性を探る。

４．研究成果

(1)開発したアプリ「ASCA」の概要と改良の経緯から見るアプリ開発に必要な視点の検討

2015 年度から､幼児の育ちと保育者の保育の支援を行うためのタブレット端末アプリを開発することを目的とし､「ASCA（Archives Sharing and Creating Anytime for preschool）」を開発している。本アプリは、保育場面で幼児が発見や感動、他者に伝えたいことを静止画(写真)と音声で記録し、それらを同じクラスの幼児や保育者と共有することができる。さらに、保育者は、幼児の静止画に対して撮影場所や内容等をタグ情報として付けることができる。これら全ての静止画と音声情報と保育者による文字情報(タグ)の記録、閲覧及び検索、静止画の印刷が可能となるように、幼児が使用する「ASCA」は、職員室など保育者が使用するサーバ用パソコンと同じ LAN で接続することでのみ使用が可能になる。同じ LAN にプリンタを接続すると、印刷も可能になる(Fig.1 参照)。

Fig.1 開発したアプリ「ASCA」の構成図

幼児や保育者が撮影した静止画や音声は、サーバ用パソコンの各自の名前がついたフォルダに保存され、誰が撮影した写真で、それらの写真それぞれにどのようなタグを付けたかが分かるようになっている。

本研究により、保育現場で保育者も幼児も活用するアプリとして、必要な機能を残しつつ、改良した結果は Fig.2 のとおりである。

実際に活用していただいた保育現場での聞き取り調査から､「セキュリティの基礎を学ばせたい」という要望があったことを踏まえ、アプリを使って静止画を撮影したり、音声を入力したりする時には、クラスのページから個人のイラストを選択し､パスワードとなる動物を 12 種類から１つ幼児が各自で決めた動物を選ぶことでログインできるようにした｡中村の提唱する｢メディア・アウェアネス｣[4] の育成の観点からも重要だと考え、ログインする経験やパスワードの動物はお友達でも教えないという保育を可能にした。したがって、自分の撮影した静止画や音声しか閲覧することができないようになっている。なお、保育者には、幼児がログイン中でもクラス全員の幼児の写真や音声情報にアクセスする権限を持たせている。

しかし、自由保育を行う保育現場での聞き取り調査では、このログイン作業を行うことで、遊びを中断することになったり、撮影の機会を逃したりすることがあったため、使いにくいと低く評価された。ログインすることで、サーバ用パソコン上でフォルダに分けて保存することを可能にしていたが、フォルダ分けの作業のために、幼児の遊びが中断することは避けたいと考え、改良案として､「みんなでモード」を搭載することにした。この「みんなでモード」は、「ASCA」のクラス画面から個人のページにロ

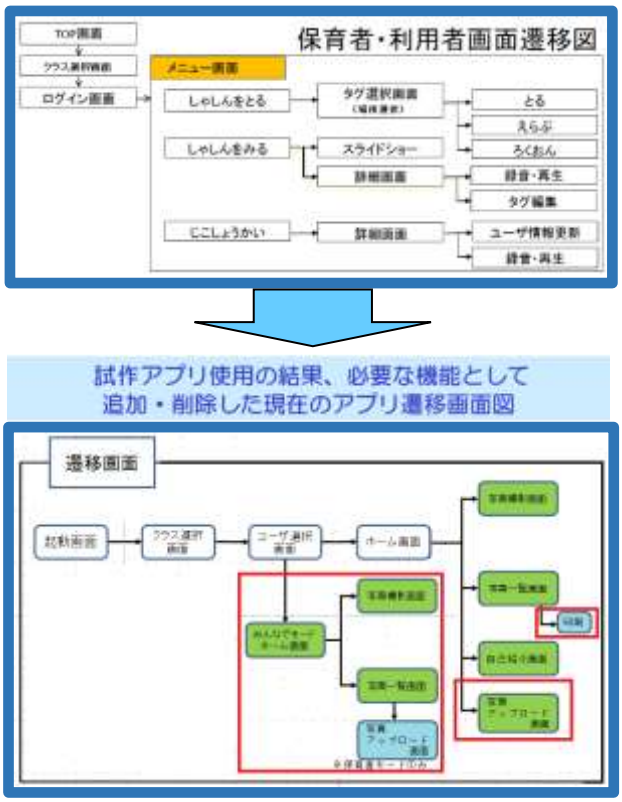

Fig.2 開発したアプリ「ASCA」の画面遷移の変化

グインせず、すぐに写真撮影等ができる機能である。「みんなでモード」で撮影した静止画は、保育者が後で誰が撮影した写真かを確認して振り分けることができるようにした。

したがって、保育現場やクラスの活動に応じて、セキュリティに関する意識を身につけることができるよう落ち着いてログインして遊びを始めるか、遊びを妨げないよう「みんなでモード」を選択し、自由に活用した後で、保育者が写真を各幼児に振り分ける作業ができるようにするか、各保育現場で活用方法を選択して使うことができるようになった。

この、「後で保育者が写真を振り分ける」という作業が出てきたことで、保育者の聞き取り調査から、「せっかくの子どもの写真を掲示して保護者に伝えるだけではなく、保育の評価に使いたい」という意見が全ての保育現場で得られた。そこで、評価支援のツールとしての活用から、「ASCA」で付与することができるタグは全て保育者が自由に作成するようにしていたが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の 10 の項目はタグ化して最初から選択することができるようにした。さらに、保育者の評価活動を支援できるようにするため、タブレットからではなく、サーバ用パソコンに保存された写真に直接タグを付与することができるようにするシステム、「ASCA」を介さずタブレットに標準搭載されているカメラ機能で撮影した写真もサーバ用パソコンの幼児の各フォルダに振り分けて「ASCA」で撮影した静止画と同様に保存し、タグを付与することができるシステムの開発に着手することにした。このシステムが完成することで、保育者の保育評価、特に近年、保育現場で活用されているドキュメンテーションの作成の援助に寄与することもできるのではないかと考える。

全てをタブレット上で処理するのではなく、サーバ機としてのみ活用していたパソコンに一部のシステムを移し替えることで、保育者の保育評価の支援ツールとして使いやすくなる可能性も見えてきた。また、常時サーバ用パソコンとタブレットとの通信を必要としていたため、アプリを活用する際、LAN 環境が充実していないことで活用できなくなる保育現場での問題も解消され、必要な時だけ LAN に接続することで、LAN 環境の整備が不十分な保育現場でもセキュリティを確保したうえで、より使いやすくなる可能性が高くなることも明らかになった。

最後に、サーバをパソコンではなく、クラウドにしたいという園の意見も 3 園からあった。日本の多くの公立園では通信環境のセキュリティ上クラウド化は難しいが、今後、保育現場でもインターネット環境やインフラストラクチャーが整備されることになれば、パソコンではなく、クラウドサーバを用いて「ASCA」を活用することも考えられる。将来を踏まえて、クラウド版の開発と実証実験を進めていくことも必要ではないかと考える。

(2)開発したアプリを活用したことによる保育現場で観察された保育への意識の変化

今回、実践的に検証していただいた保育現場は全て、この「ASCA」の導入が初めてのタブレット導入となる。研究の方法で述べたように、保育現場によって活用の仕方は違ったが、7 園中 6 園が、保育者も幼児も活用することで幼児の遊びや活動が充実するだけではなく、保育者の幼児理解が深まり、さらに、保育評価が充実するという結論に至っていた。

「ASCA」を用いたタブレット活用の広がりとしては、「大きなテレビ(保育室に備えているテレビをモニタ代わりに使用した)にタブレットをつなぐことで、クラス全員で子ども一人ひとりが撮影した写真を見ながら話をすることができるようになったので、遊びや活動の振り返りや今後の見通しの共有に使えるようになった」という意見や「子どもが意見を発表しやすくなるだけではなく、お互いに聞き合う経験を積むことで、友達の発表を聞く、話し合うことがしやすくなった」という意見が出された。このような幼児の姿は、年長児なのでタブレットを用いない保育でも成長する姿として見られる場面ではあると思われる。しかし、参与観察でも、実際に話すことが苦手な幼児が話すことに挑戦しようとする姿が各保育現場で見られたことや、保育者が保育の計画段階から活動の振り返りや次の計画をクラスで考えるという活動を強く意識して取り入れたことにより、結果として、幼児の発表する場や話し合う場が増え、幼児の遊びや活動が充実したと感じることができたようであった。

タブレットの活用による幼児の遊びや活動の充実という点では、幼児が「ASCA」を用いてタブレットを活用することにとどまらず、インターネット検索機能の活用、急病の幼児のための医師等への連絡ツールとしての活用、遠隔交流としての活用を保育者が考え、実践することができるようになっていた。

インターネットでの検索は、そのまま検索結果を見せるのは現在は難しく、図鑑のように気軽に使えないという意見が得られた。図鑑や本などの活用に加えて、音声入力機能を用いて、幼児が自らの音声で検索サイトに検索したいことを入力し、保育者が主に画像検索の結果を吟味しながら伝えるという活用をしていた。遠隔交流では、同じような遊びをした同じ市の園どうしがつながることで、さらに興味や関心が深まったという意見をいただいた。音声入力や遠隔交流を通して、幼児がタブレットに話しかける時の話し方を意識するようになったという結果が出た。特にある幼稚園では、話す時にアナウンサーを意識して話す姿が「ASCA」でも見られたが、検索する活動などを通して、「聞こえてるかな」「伝わるかな」と幼児が話しながら自分の話し方を工夫して活用している姿が見られた。また、家庭でも AI アシスタントを使う時に話し方を意識して子どもが使うようになったと保護者から話を聞いて、幼児の成長を保護者と共有できたというエピソードを話してくれた幼稚園もあった。

以上のように、幼児が活用することを目的としてタブレットを導入した園では、「子どもの撮影した写真を見ながら、その子どもと話をすることで、より子どもの理解が深まる」「子どもの

新たな一面が見える」と評価され、「ぜひ保育評価に活かしたい」という意見や「ドキュメンテーション作成の支援として使うだけではなく、子ども一人ひとりのポートフォリオ作成に役立てたい」という意見が聞かれた。

一方、保育者のみが活用するという形で導入した幼稚園 2 園のうち 1 園からは「保育者が使ってこれだけ意味があるので、子どもに活用させてみると、保育者の子ども理解が進み、評価も深まるのではないか」という思いに至り、保育の中で幼児に自主的に活用させるようになるという結果がみられた。このらせん的なタブレットの活用が、保育者にとっても幼児にとっても意義ある活用と考える。この視点を踏まえたうえで、幼児にも保育者にもより使いやすいアプリを開発する必要があると思われる。

(3)国内外のタブレット活用やアプリ調査から

2018 年 10 月、韓国ソウル市ノウォン区 NOWON Support Center for Children 及び、同センター長 Kim Seung Ok 先生の協力を得て、ソウルでの幼児向けのアプリ開発会社及びタブレットを含めた保育現場での ICT 活用について見学及び聞取調査を実施することができた。韓国では、アプリ開発がヌリ課程に基づいて行われていること、必ず幼児教育の専門家や元園長など保育を理解している者をスタッフチームに入れて開発していること、教科書や絵本の販売や保育者研修などの実績がある会社がその実績をもとに開発を行うことが多いため、インフラも含めた提供を無料で行っていること等が明らかになった。また、保育者研修では、アプリを使うことに対しては否定はしないが、保育現場では幼児の活動に合わせてアプリを柔軟に活用することが保育者の役割として非常に重要であると指導していることが分かった。

日本でも、2007 年に日本保育学会において、NHK E テレの「からだであそぼ」のコンセプトから環境と幼児の運動あそびについて、番組制作スタッフと保育と ICT について研究している研究者が共同で自主シンポジウムを開催し、保育現場におけるメディア活用について考える場があった。おたよりや連絡帳をはじめとした保護者連携と ICT に関する研究は 2002 年から見られるが、そこで蓄積されたデータ分析研究も始まっている。さらに、保護者連携のためのアプリを開発している会社との協同ワークショップが 2018 年 8 月に東京大学で開催されるなど、保育者と開発者と研究者の連携も推進されつつある。

このような、研究者、保育者、開発者の三者が協同して行う研究については、今後の日本の保育現場での ICT 活用を考えるためにも、これからも必要不可欠だと考える。

(4)今後の課題

日本では、まだ ICT 環境のインフラストラクチャーが整っておらず、特に幼児教育や保育の現場では、メディアの活用可能性を否定されてきた経緯から、環境が整備されているところはわずかである。しかし、近年になって、日本保育学会でもメディアを活用した研究が広がりを見せ始めているだけではなく、文部科学省が「教職課程コアカリキュラム」を作成し、保育者養成校においても保育者の ICT 活用能力にとどまらず、保育に ICT を活用することを学ぶ機会を設ける方向性を示していることからも、今後、保育現場でどのような ICT 活用が望ましいのか、またどのような活用可能性があるかを検証していく必要がある。本研究では、幼児の活用と保育者の活用を同時に考えたオーサリングツールとしてのアプリ開発を通して、幼児の興味や関心に応じた、あそびの中での主体的な学びを促す幼児期ならではの保育現場で、活動テーマや保育形態にとらわれず、幼児の遊びを通した学びの可視化と保育者の幼児理解や保育評価、保護者連携を支援するための両方からアプリを開発することで、保育現場でのタブレット活用が意味のあるものになるという一定の結果を得ることができた。特に、自由保育においてタブレット等を活用する場合は、アプリで設定したテーマで幼児が学ぶ活動だけではなく、幼児の活動や興味・関心に応じ、幼児の活動の速さに対応できるユーザーインターフェースをもつアプリの開発が求められることが明らかになった。

しかし、セキュリティに対する考え方の普及や、タブレットの確保やインターネット環境等のインフラストラクチャーの整備など、課題は多く残されている。しかし、限られた環境であっても、保育現場における保育での ICT 活用の良さや可能性を高めることで、今後ますます急速に発展するであろう ICT 社会に流されるのではなく、ICT 社会で幼児自らが主人公となって ICT を活用する力の基礎を育てるような幼児教育を提案することができると考える。

＜引用文献＞

1) 小平さち子(2016)「保育現場におけるメディア保有率及び活用率の調査結果 ～2015 年度 幼稚園におけるメディア利用と意識に関する調査を中心に～」『放送研究と調査』7 月号 pp.14-37

2) 松山由美子ほか(2017)「保育現場での活用を想定した幼児向けアプリの評価観点の検討」『日本教育工学会論文誌』40 巻 Suppl.号 pp.117-120

3) 松山由美子ほか(2017)「幼児の学びと保育の記録・省察を支援するタブレット用アプリ「ASCA」を活用した保育実践」『日本保育学会第 70 回大会要旨集』発表 ID.K-B-3-101

4) 中村恵(2014)「幼児期から学童期を繋げる学びのアセスメントの検討」『日本教育工学会論文誌』38 巻 Suppl.号 pp.33-36

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 森田健宏，堀田博史，中村恵，奥林泰一郎，佐藤朝美，深見俊崇，松河秀哉，松山由美子，笠井正隆	４．巻 44
２．論文標題 幼児へのグローバル教育の導入を目指すためのメディア利用の試み	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本教育メディア学会研究会論集	６．最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森田健宏,浦嶋敏之,堀田博史	４．巻 12
２．論文標題 幼稚園等における園務情報化への対応の動向	５．発行年 2018年
３．雑誌名 関西外国語大学教職教育センター教職研究・実践集録	６．最初と最後の頁 30-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤朝美，松河秀哉，椿本弥生，荒木淳子，中村恵，松山由美子，堀田博史	４．巻 43(Suppl.)
２．論文標題 園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本教育工学会論文誌	６．最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/43/Suppl./43_S43039/_article/-char/ja/	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松山由美子,奥林泰一郎,佐藤朝美,中村恵,松河秀哉,堀田博史,森田健宏
２．発表標題 タブレットを活用した保育における保育者の援助活動の変容
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀田博史,松山由美子,佐藤朝美
２．発表標題 幼児教育におけるメディアの効果的な活用法を探る
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀田博史,佐藤朝美,森田健宏
２．発表標題 保育でのタブレット端末活用場面における取り組みやすさの評価
３．学会等名 第25回日本教育メディア学会年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松山由美子,佐藤朝美,奥林泰一郎,中村恵,森田健宏,松河秀哉,堀田博史,深見俊崇
２．発表標題 子どもの学びと保育者の援助を支援する「ASCA」の開発
３．学会等名 第15回日本子ども学会議学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松山由美子
２．発表標題 保育の理解と実践を支えるためのメディア活用（保育者養成校における教育での工夫とアイデア）
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松山由美子，中村恵，深見俊崇，堀田博史，松河秀哉，森田健宏，佐藤朝美
２．発表標題 幼児の学びと保育の記録・省察を支援するタブレット用アプリ「ASCA」を活用した保育実践
３．学会等名 日本保育学会第70回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 堀田博史，松山由美子，佐藤朝美，中村恵，松河秀哉，奥林泰一郎，深見俊崇，森田健宏
２．発表標題 保育でのタブレット端末を活用した遊びとパソコン遊びの共通点
３．学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤朝美，松河秀哉，堀田博史，松山由美子，中村恵，椿本弥生，荒木淳子
２．発表標題 学びのポートフォリオ共有による園と保護者の連携：幼稚園教諭インタビューによる検討
３．学会等名 第14回子ども学会議（学術集会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 森田健宏，堀田博史，中村恵，奥林泰一郎，佐藤朝美，深見俊崇，松河秀哉，松山由美子，笠井正隆
２．発表標題 幼児へのグローバル教育の導入を目指すためのメディア利用の試み
３．学会等名 日本教育メディア学会2017年度第2回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松山 由美子，中村 恵，佐藤 朝美，森田 健宏
２．発表標題 保育における ICT 活用の変遷と課題
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松山 由美子，中村 恵，堀田 博史
２．発表標題 幼稚園教諭養成課程における「保育でのICT活用」に関する研究－シラバス調査の結果から－
３．学会等名 日本教育工学会2020年春季(第36回)全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤 朝美，松河 秀哉，椿本 弥生，荒木 淳子，中村 恵，松山 由美子，堀田 博史
２．発表標題 園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価
３．学会等名 日本教育工学会2019年秋季(第35回)全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 タブレット端末は、子どもの主体的な遊びを支えるツールとなり得るのか	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 126(62-67)
３．書名 発達150：子どもをはぐくむ主体的な遊び	

〔産業財産権〕

〔その他〕

オンラインシンポジウム 「子どもとメディア～幼児教育における研究・実践の最前線～」
（司会）佐藤朝美，（シンポジスト）堀田博史，田爪宏二，森田健宏，松山由美子，中村恵，（コメント・総括）薛燁，榊原洋一
https://www.blog.crn.or.jp/event/02/02/13.html

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森田　健宏 (MORITA TAKEHIRO) (30309017)	関西外国語大学・英語キャリア学部・教授 (34418)	
研究分担者	松河　秀哉 (MATSUKAWA HIDEYA) (50379111)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師 (11301)	
研究分担者	堀田　博史 (HOTTA HIROSHI) (60300349)	園田学園女子大学・人間健康学部・教授 (34516)	
研究分担者	奥林　泰一郎 (OKUBAYASHI TAIICHIRO) (60580941)	大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員 (14401)	
研究分担者	佐藤　朝美 (SATO TOMOMI) (70568724)	愛知淑徳大学・人間情報学部・准教授 (33921)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	深見　俊崇 (FUKAMI TOSHITAKA) (80510502)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授 (15201)	
研究分担者	中村　恵 (NAKAMURA MEGUMI) (90516452)	畿央大学・教育学部・准教授 (34605)	